

情報記号論の諸問題

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

石田英敬

研究室：駒場キャンパス9号館323

MAIL : nulptyx@boz.c.u-tokyo.ac.jp

URL : <http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~nulptyx>

<http://www.nulptyx.com/>

第2回講義
「記号の概念をめぐって」
(その1)

目次

- I. Problematic Ecce Signum 或いは〈記号〉の問題論的起源
- II. Archeology 〈人工記号〉の記号論
- III. Epistemology 現代記号論の〈記号〉仮説
- IV. Interface 〈記号〉と〈情報〉

Problematic

I Ecce Signum

〈記号〉の問題論的起源

1

Ecce homo

人類のあけぼの

直立歩行

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
“R.DEBRAY LE FEU SACRE”
の直立歩行を省略させていただきます。

直立によって
可能になった、
人間の
脳の解放
と
手の解放

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
『類人猿と人類』
を省略させていただきます。

<ことば>

と

<身振り>:

<記号>

と

<技術>

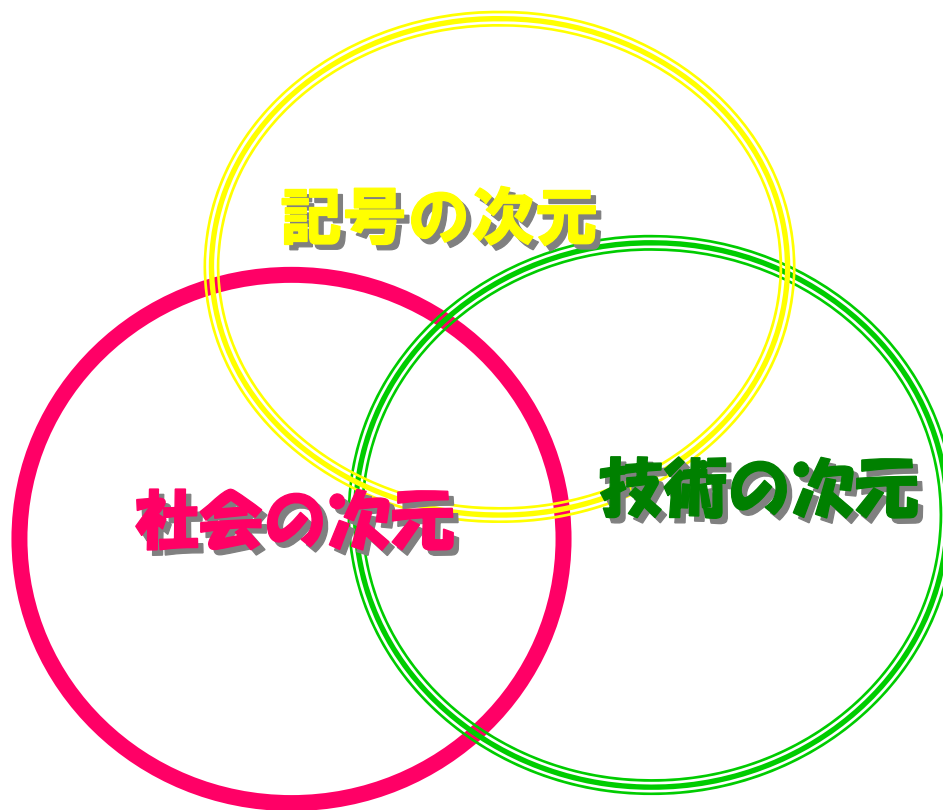
「人類の曙」

「人類の曙」は<記号の問題圏>と<技術の問題圏>とを同時に発生させた

スタンレー・キューブリック監督の古典ともいえるSF映画『2001年宇宙の旅』の始まりを思い出してみてください。「人類のあけぼの」と題されたその冒頭では動物の骨を棍棒として使用する類人猿たちが道具を使わない他のグループを駆逐する場面が映し出されます。道具の使用が人類の始まりだというわけです。つづいて上空に投げ上げられた動物の骨はすぐに宇宙空間を高速度で航行するロケットの姿に変わります。道具の使用に始まる技術の歴史が行きついたのが近未来の宇宙航行のテクノロジーであることを映画はこうして示しているわけです。

先史学者のアンドレ・ルロワ＝グーランが書いたように、動物の形態進化の観点からいえば、人間の祖先において直立歩行は手を解放すると同時に脳を発達させる結果をうみました。直立することによって前足は歩行という機能から解放されて手となり、身ぶりが可能になります。頭は地から離れ、脳は鼻面との密着から解き放たれて容積が局大化します(図 参照)。ルロワ＝グーランによれば、これが「人類」を生み出した手と脳の解放という進化史上の出来事です。手の進化がもたらすのが「技術」であり、脳の発達もたらすのが「言語」です。私たちが考えようとしている問題との関わりでいえば、手と身ぶりの解放につらなるのが技術の次元であり、脳の解放につらなるのが記号の次元です。

＜記号・技術・社会＞のボロメオの輪



技術とPro-thesis

旧石器時代における石斧という道具の使用を考えてみましょう。この道具の発生は、人間の身体が獲物としての対象に働きかけるときに身体の働きの延長となる人工器官が生まれたことを意味しています。道具という人工器官は、身体の代わり・延長という意味では身体の拡張を意味しますが、それだけではありません。道具は用途を指定します。石斧であれば、獲物の捕獲という用途のために使用されるという、身ぶり対象との関係が道具をとおして予め指定されるということが起こってきます。人工器官(prosthesis)は、人間の身体のじっさいの所作に先立って、対象を予め(pro-)定立する(thesis)という役割を果たすのです。

環境の発生

このような動作の指定および対象の〈前一定立 (pro-thesis)〉は、道具を通して反復されることになります。つまり、道具は用途を指定して身ぶりの反復を導き入れ、同時にその対象を予め定めることになる。道具はそれを作り出した個体でなくても使用することでき、その使用によって別の個体も技術がつくりだす環境のなかに導き入れられます。道具の使用はこのように人間と自然との関係を集団的に決定づけることになります。

文化と民族

ヒトは自然の前に裸で投げ出されているわけではなく、まず技術がつくりだす環境の中にヒトは生まれます。技術は基本的に集団的で加算的なもので、技術的発明は伝承され積み重ねられていきます。またそれゆえに革新されたり淘汰されたりするものです。冒頭のドゥブレの引用がいうように、技術は遺伝子プログラムにもとづく生得的なものではなく、伝承され後天的に習得されるものであるということが重要です。旧石器時代における石器に見られるように、道具使用は道具を作り出す技術の伝承を必然的に引き伴います。この伝承は遺伝子プログラムによるものではなく、「文化culture」と呼ばれるべきものです。民族(ethnicity)を特徴づけるのは人種ではなく技術の伝承にもとづいた固有の文化なのです。

「私たちの遺伝子プログラムに書き込まれていない振る舞いやパフォーマンスの全てをと呼ぶことにしよう。自然言語とはよく言ったもので、自然言語はそれ自体としては技術ではない。どんな赤ん坊であれ正常に生まれれば、特別な習得なしに年齢とともに実現する言語能力を備えている。私たちはみな舌と喉頭を持って生まれるが、粘土板と楔形文字、ペンと紙とは『余分』なものである。この余分が任意なものである証拠に、アマゾンやニューギニアの奥地にも言葉をもたない社会があるのを発見した民族学者は皆無なのに、『文字をもたない社会』は多数存在している。文字が技術であることを、文字を発明したシュメール人たちはすでに理解していた。彼らは言う、『話し言葉は神々から賜った贈与であり、文字は人間たちの発明である』、と。」(レジス・ドゥブレ『神、その行程』)

– Regis Debray, raired. Odile Jacob, 2001, p. 15、
翻訳、傍点は引用者

2 文字

文字の発明による脳の解放の系譜と 手の解放の系譜との出会い

〈記号〉が〈技術〉に出会う

書かれたモノとしての〈メディア〉の発生

〈文字＝技術〉という大問題の発生

文字と文法

→「文字化の技術論的革命」(Sylvain Auroux)

文字の成立と「文法」の登場

Gramma → Grammar

(文法のパラドクス)

「文法能力」は「生得的な能力」では：
ない/ある？

メタ言語の発生と歴史の成立

→ 記号論の前史の成立

人間が自己の言語能力を対象化できるようになるということは何を意味するのか？

1. 象徴の知の成立（法則化）
2. 象徴の権力の成立（立法化）

Ex. メディオロジー的見取り図

4つのメディア圏の文明史

1. MNEMOSPHERE 記憶圏
2. LOGOSPHERE 書き言葉圏
3. GRAPHOSPHERE 活字圏
4. VIDEOSPHERE 映像圏

Archeology

II <人工記号>の記号論

近世の記号論は人工記号が問題となったときに構想されます

先週話した「人間と人文知の揺らぎ」(cf.「4つのポスト状況」)と対応するように、近代の始まりにおいても「知の揺らぎ」が存在します。そして「記号論」はその危機への解答のひとつです。 →

神学的秩序のゆらぎに対する解答

1. 普遍言語の危機
2. 理性の危機 計算的理性の登場
3. 普遍学の構想
4. 人間の知を体系化する百科全書という要請

以上への回答として提起されたのが近世の記号論です。

John Locke: *An Essay concerning Human Understanding* から

第三に、三番目の部門はセーメイオーティケー
 $\sigma \eta \mu \varepsilon \iota \omega \tau \iota \kappa \eta$ すなわち記号論と呼べよう。記号
の最も通常のもの言葉だから、ロギケー
 $\lambda \omicron \gamma \iota \kappa \eta$ すなわち論理学と名づけるのも十分ふさ
わしい。その仕事は、物ごとを理解したり、物ごとの知識
を他の人たちへ伝えたりするために、心が使う記号の本
性を考察することである。

（ 第21章 学の区分について 「人間知性論」

大槻春彦 訳 中央公論社 『世界の名著』 188

頁)

ロックの「人間知性論」

「人間」の「知性」を保証する三つの学問区分の一つとして「記号論」が要請されていることが分かります。

Mathesis universalis の構想

En y réfléchissant plus attentivement, il finit par devenir clair pour moi que seule les choses, et toutes les choses, dans lesquelles c'est l'ordre ou la mesure que l'on examine, se rapportent à la mathématique, que importe que cette mesure soit à chercher dans des nombres, des figures, des qstres, des sons, ou quelque autre objet; que par conséquent il doit y avoir une science générale qui explique tout ce qu'il est possible de rechercher touchant l'ordre et la mesure, sans assignation à quelque matière particulière que ce soit; et que cette science s'appelle, non point d'un nom d'emprunt, mais d'un nom déjà ancien et reçu par l'usage, la mathématique universelle, puisqu'elle contient tout ce en vertu de quoi l'on dit d'autres sciences qu'elles sont des parties de la mathématique. (Descartes *Reglae* Règle IV)

デカルトの「方法」

- ・デカルトの「普遍学」の構想
→ 知の統合と形式化の問題を提起
- ・1629年11月20日のメルセンヌ神父宛書簡
→ デュ・ヴァレーの「新言語」の構想についての批判的言及

ライプニッツの「普遍計画」

1. 「一般言語」の計画
2. 「普遍記号法」と「結合法」
3. 「百科事典」と「思考のアルファベット」
4. 「記号計算」
5. 「二進法的記数法」

1 「一般言語 Lingua generalis」

知識を単純観念に分解して数字を割り振り、
それをさらにアルファベット化することによって得られる人工言語

ボルヘス 「ジョン・ウィルキンズの分析言語」

ウィルキンズは宇宙を四〇のカテゴリーないし類に分けるが、類は差に、差はさらに種に分かたれる。おのおのの類には、二文字の単音節言語があてられ、おのおのの差には子音、おのおのの種には母音があてられる。こうして、たとえばdeは四大を、debは四大の最初である火を、debaは火の一部をなす炎を意味する。ルテリエが考案した類似の言語(1850)では、aは動物、abは哺乳動物、abiは草食動物、abivは馬科の動物、aboは肉食動物…。またボニファシオ・ソトス・オチャンドの言語(1845)では、Imabaは建物、imacaは娼家、imafeは病院、imafolはペスト施病院、imariは家、imaru は別荘…。(「異端審問」中村健二訳 155頁)

2 「結合法論 Dissertatio de arte combinatoria」1666

有限なアルファベット文字を使ってつくりだすことのできる言表の最大数は、真なるもの、偽なるもの、無意味なものをふくめて、どれくらいか？

3 思考のアルファベットと新しい百科事典

「(人間の思考の)アルファベットの文字を結合し、それらの文字によってつくられた語彙を分析すれば、あらゆることを発見し判断することができる」
(「記号言語の歴史と推奨」)

→ <辞典>と<事典>との一致の夢

4. 記号計算

人間のあらゆる推論はなんらかの記号 (signum) ないし文字記号 (character) によって遂行される。実際、事物そのものだけでなく、事物の観念も、判明に見て取ることができるとはかぎらないし、そうでなければならぬわけでもない。それゆえ、それに代わって、簡略化のために、記号がもちいられるのである。...

あらゆる推論は記号の使用法にかかっており、知性のおかすあらゆるあやまりは計算の誤り同じことである。... 推論したり書いたりするさいに上にのべたような記号を利用する者はけっして誤りを犯すことはないだろうし、たとえ誤りがあっても、自分の誤りであれ、他人のあやまりであれ、ごく簡単な試し算をおこなうことによって常に独力で見つけることだろう。」「普遍的知識あるいは哲学的計算について」

哲学的計算の「盲目的」思考

- ・記号計算によって思考の自動的な計算“処理”が可能になる。
- ・計算的理性と意味論との分離

5.「二進法的記数法」

- ・「易経」の発見
- ・「卦」と二進法計算

まとめ

近世記号論の位置

近代の始まりに分節化された知のプロジェクトの配置をよく示している

- ✓ 自然言語と人工言語
- ✓ 推論と計算
- ✓ 辞書と事典
- ✓ セマンティクスとシンタックス
- ✓ 形式化と自動化

(→ M. Foucault のいう「mathesisの時代」)

＜近代＞のもう一方の縁へ...

→次回

「記号の概念をめぐって」(その2)

III. 現代記号論の＜記号＞仮説